

井波彫刻品

きざむ技にも、年輪がある。



富山県推奨
とやまブランド

人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語

VOL.10



富山県推奨
とやまブランド

厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山県」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド
「井波彫刻品」認定事業者

井波彫刻協同組合
南砺市(井波)北川733
TEL.0763-82-5179
<http://inamichoukoku.com/>

木にいきづく魂を、

一二百年の技が彫りあげる。

【木の言う とおりに彫る】

工房の扉を開けると木の香りが漂ってくる。ノミの柄尻を打つ小気味のいい槌音が工房に響く。板の間に敷いた薄い座布団に腰をおろし、クスノキの板と向き合うのは善本秀作さん。井波彫刻を代表する彫刻師の一人だ。

200種以上のノミや彫刻刀を使い、木を彫りあげる井波彫刻。座布団のかたわらでは、刃の幅やかたちの異なる何種類もの道具が順番を待

っている。

「人が木に合わせてやるんですよ」。時おり、手を休めて構図を確かめながら、善本さんはつぶやく。彫る部分の図柄に合わせてノミを選び、木肌を滑らせていく。その動きには一切の迷いがない。

彫刻の材料は、ケヤキ、クスノキ、ヒノキ、キリ、サクラなど。半年から二年をかけて乾燥させ、木の暴れがおさまるのを待って仕事が始まる。

「同じ木でも、育った場所や伐った時期で、硬さも違えばくせも違う。自然に逆ら

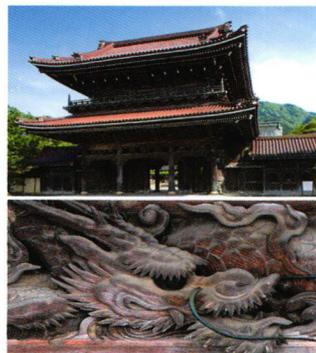
わず、木の言うとおりに彫るのが大事」。そう話しながら、善本さんは再び道具を手に木に向かう。

【度重なる災いが 技を生んだ】

南砺市井波の八日町通り。石畳の坂道の両側には、木彫りの工房が立ち並ぶ。坂を上りきったところに建つのは、本願寺五代・緯如上人が創建した瑞泉寺。600年以上の歴史を持つ古刹は、井波彫刻の技の母胎でもある。

瑞泉寺の背後には八乙女山やまがそびえる。この山から吹き下ろす強い南風によって、門前町は幾度かの大火に見舞われた。度重なる災いは、皮肉にもこの地に木彫の技を根づかせ、伝統を育んでいくきっかけとなった。

18世紀、宝暦の大火で焼失した瑞泉寺の堂塔再建にあたり、その彫刻を託されたのは、京都本願寺の御用彫刻師を務める前川三四郎まへかわさんしやう。再建なった本堂や山門を、前川三四郎は見事な彫刻で飾った。



明治の大火を逃れた瑞泉寺山門。その唐狹間を飾る「波に籠」は前川三四郎の作



井波のメインストリート八日町通り

瑞泉寺の再建に 腕を奮った彫刻師 その技を今に受け継ぐ。

前川三四郎のもとで彫刻の技を学んだのが、田村七左衛門をはじめとする地元井波の宮大工たち。寛政4年(1792年)、七左衛門が瑞泉寺勅使門に彫刻した「獅子の子落とし」は、日本彫刻史上の傑作とされている。

その技の系譜が、220余年の時を経て、現在の井波彫刻へと受け継がれている。



製作中の欄間は荒彫り段階

自分

木と向き合うことは、 自身と向き合うこと。

「宮大工の技から彫刻師の技へ」

江戸時代、井波は、優れた宮大工を輩出する地として、京や江戸にもその名を轟かせた。井波の宮大工たちは、各地の神社仏閣、曳山や山車などの造営に携わり、意匠をこらした彫刻に腕を奮った。

宮大工の技として磨かれた井波彫刻は、幕末から明治にかけて、日常の美を求める技へと広がりを見せる。寺院欄間の技を住宅用に生かした彫刻欄間。その意匠は、民家建築にも広く採り入れら

れ「井波欄間」の名を高めた。昭和になってからも、東本願寺、築地本願寺、日光東照宮をはじめとする各地の寺社彫刻を手がける一方、欄間、獅子頭、置物、衝立ついたてなど、伝統の技法を生かした多彩な工芸を世に送りだした。宮大工の技は、彫刻師の技となった。

現在、井波の彫刻師は約300名。そのうち80名以上は作家として創作にも取り組む、日展などの美術界で活躍する。井波は、多数の芸術家が技を競いあう「芸術のまち」である。



ノミと彫刻刀は200本を越す

彫ったものには 自分が映る

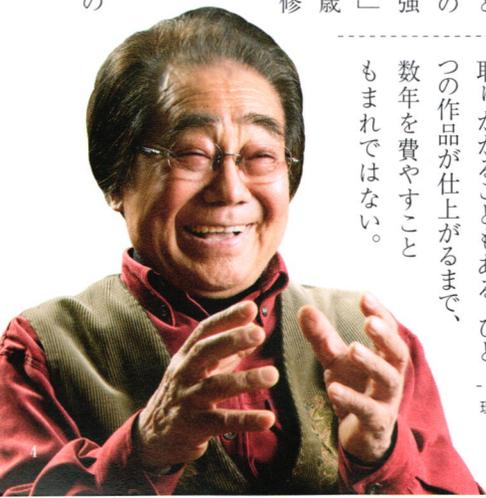
「私は芸術家じゃなくて職人です」と善本さんは言う。欄間や置物、社寺彫刻といった伝統的な仕事を続けつつ、自身の創作活動にも力を注ぎ、人物像を中心とした彫刻作品で美術界から高い評価を得てきた。現在は日展評議員も務める。

「職人の仕事は体で覚えるもの。新しいものを彫ることが、職人にとっては何よりの勉強です。創作も、技の勉強になればと思って始めました」北海道旭川に生まれ、26歳で井波彫刻の道に入った。修業中はなかなか仕事をさせてもらえない時期もあった。「作りたい」。ただその一心で仕事を続けた。半世紀、一筋に求めてきた彫刻の

技が認められ、平成15年には「現代の名工」に選ばれた。

「木と向き合うことは、自分と向き合うこと。彫ったものには必ず自分の魂が投影されているんです」と善本さんは言う。

下絵を起こし、それを木に写して彫り進めるのが井波彫刻の一般的な工程。善本さんは、下絵の構想に十分な時間をかける。粘土で原型を造り、そこから彫りの作業に取りかかることもある。ひとつの作品が仕上がるまで、数年を費やすこともまれではない。



現代の名工・日展評議員 善本秀作さん

時代が求めるかたちを彫る。 技を頑固に守りながら、



学問成就を願って飾られる天神様

「次代に技を伝える 「徒弟制度」

「井波彫刻はすべての作品がオンリーワンの一点もの。図柄や造形はもちろん、木肌に残ったノミのタッチにも、彫刻師一人ひとりの個性が表れています」。井波彫刻協同組合の永井恵子ながいけいこ事務局長はそう話す。

完成した型があるように見える天神様も、ひとつひとつの作品を注意深く見れば、顔立ちや表情に違いがあることに気づく。

「このかたちでなければと

いう決まったものは、井波彫刻にはありません。受け継がれた技を頑固に守りながらも、その時代、その時代に求められるかたちを創りだしているのが井波彫刻の特徴です」（永井事務局長）

技の継承にも広く門戸を開く。昭和22年創設の井波彫刻工芸高等職業訓練校は、日本で唯一の木彫刻専門の職業訓練校。入学した生徒は、ふだんは親方のもとで修業し、週1〜2回の授業でデッサンや彫塑の基礎を学ぶ。

親方や兄弟子たちと寝食を共にしながら、技と心を身につける「徒弟制度」。現代っ子には厳しくも思える制度だが、彫刻を志す若者は毎年全国各地から集まる。卒業生は500人を超え、その多くが彫刻師や作家として活躍する。

作家と持ち主が 創る共同作品

平成21年、井波彫刻の粋をこらしたユニークな作品が話題をさらった。若い世代の作家が制作した「井波彫刻ギター」。木彫りの龍がギターに絡みつくインパクトあるデザインは、井波彫刻の美しさを全国に知らしめた。

ギターのほかにも、パネル、サイン、表札、クラフト作品など、現代空間に調和する多

彩な造形が井波彫刻の技法から生まれている。

「自分の感性に合った作家を見つけ、対話をしながら、納得のいくオンラインワンの作品を注文するのがおすすめ」と永井事務局長は話す。

木彫りの作品は、年月を経るほどに、持ち主の息づかいがしみ込んで味わいを深めていく。やがて、持ち主の魂が木肌に表示されるようになる。そのとき、彫刻は、作家と持ち主の「共同作品」となる。



上：職業訓練校では彫刻を基礎から学ぶ 下：4年ごと
に開催される「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」

message

奥行きある世界を表現する技

うまのさちお
上野幸夫 さん
職藝学院教授・文化財修復建築家



明治期の和風建築を調査していますと、井波欄間をよく目にします。余白を生かした遊び心ある仕事を見るにつけ、洗練された意匠と技に感嘆させられます。現代の井波彫刻にも、奥行きと立体感ある世界を表現する優れた技が受け継がれています。現代の住空間にも調和する、新しい感覚の彫刻が生まれていることにも注目します。

【関連施設】



瑞泉寺の伽藍配置をモデルに、イギリスの建築家ピーター・ソルター氏がデザインした井波彫刻のシンボル施設。伝統木彫刻から現代彫刻、工芸作品まで、技の粋を集めた作品を200点以上常設展示。企画展も定期的で開催する。

井波彫刻総合会館

住 南砺市(井波)北川1733
 図 JR高岡駅よりバス55分(閑乗寺口下車)
 電 0763-82-5158
 開 9:00~17:00(入館は16:30まで)
 休 第2・第4水曜(祝日の場合は翌日)、年末年始
 料 大人500円・小中学生250円(団体割引あり)



左：井波彫刻ギター「龍剣」 右上：瑞泉寺の木彫サイン
右下：井波彫刻照明付きチエアー「森の木漏れ日」